

マス・コミュニケーションを構成する各過程の単純化論考 —より簡単に使えるリテラシーを広めるために— An Introduction of More Beneficial and Simple Style of Media Literacy: Simplification of Each Process that Constitutes Mass Communication.

前田 益尚
Masunao MAEDA

近畿大学文芸学部文化・歴史学科 Kindai University of Cultural Studies.

要旨…本研究では、マス・コミュニケーションの過程を簡潔に分析することから、流れが帰着する受け手、誰もが駆使できるシンプルなりテラシーを探究した。シミュレーションとして、大学で行われる一対多の講義形式のコミュニケーションを使い、学生が単刀直入に発揮できるリテラシーの拠り所を直観に見出したのである。それは、マス・メディアを介した時代精神や文化を説明する場合にも適応でき、結果、万人の受け手が使える有効なりテラシーを提言する。

キーワード 送り手, メディア, 内容, 受け手

1. 研究の目的

社会情報の伝達方法として、上意下達の効率性を重視したマス・コミュニケーションは、近代合理主義の象徴であり、多くの問題点も指摘されて来た。片流れの一方向的な情報流通であるマス・コミュニケーションは、多くの市民に従属する態度を強いると考えられたのである。では、すべての市民が発信できるインターネットなど、双方向ネットワークが出現した現在は理想的な情報環境かということ、決してそうとは言いきれない。逆にネット社会は、善も悪も玉石混交の情報が氾濫するアナキズムを体現して無法地帯になる恐れがあり、負の局面も見せている。

そこでまず、問題を孕みながらも、今なお社会情報の伝達方法として正統性を維持しているマス・コミュニケーションの各過程を分解して単純化し、その功罪を理論的に検証する。検討した結果、アラが見つければ、誰もが簡単につけ入ることのできる直観のリテラシーを提唱する。

2. 研究の方法

大学でメディア論の講義を行って 20 年超。講義の終了間際にかけるミニツレポートを読んでもと、次世代の感受性の進化が見て取れる。

一対多の授業をめぐる参与観察から見えた学生の態度は、多彩である。例えば、従属というより、「ハイハイ先生のおっしゃりたいことはよくわかりました。」という開き直りの姿勢。他には、異議申し立てというより、「〇〇はおかしいやんけー！」という関西ならではのツッコミ。さらに、「ここで授業するより、メディアに出て(万人に向けて) 言ってください。」という、無関心ではないが、他人まかせの態度。「先生、(のどのがんで手術の後遺症があるのに、) 声デカいなー！」という授業内容とは関係ないところで、半笑い。などなど、授業における受講態度からだけでも、多様なリテラシーの発露が析出される。

一対多の講義という単純化したシミュレーションを足掛かりに、同様の一対多であるマス・コミュニケーションの過程で、受け手のつけ入るスキを理論構築して、学生のみならず万人が簡単に使えるリテラシーを編み出してゆく。

3. 単純化した送り手論をめぐる

インターネットの理論枠組みとも言える「ネットワークキング」という概念の下で、先ず保障されるべき条件を H・M・エンツェンスベルガー (1970) は、誰でも情報を送ることが可能な「各受容者は潜在的伝達者」、そして情報が自由に行き交う「参加者の相互作用、フィードバック」としていた。さらに双方向性は、万人が情報を発信できる「大衆の可動化」、それを誰にも管理されない「自己組織化による社会的コントロール」と説明しており、端的にまとめると全面的な【受け手の送り手化】に行きつくのである。

しかし、そもそもエンツェンスベルガーが言う「各受容者は潜在的伝達者」、「大衆の可動化」を、現代の受け手は希求しているのであろうか。確かに、インターネットがもたらす SNS (social networking service) でプライバシーを発信する若者たちを見るにつけ、見られたがっていると思えない。また、継続的に発信する姿には、見られていないと不安なのかとさえ見える。しかし、芸能人が結婚報告では喜んで記者会見を開いても、不倫報道には口をつぐむように、SNS ユーザーたちも、すべてのプライバシーを開示し、監視されたがっているとは考えられないだろう。

結果、「受け手は本当に送り手になりたがっているのであろうか。」という疑問が出て来る。D・ライアン (1988) らが既に指摘している様に、自らが送り手になるという事は、今度は逆に送り先の受け手から監視される立場にもなる。ここに受け手が持つべき究極のリテラシーは、【受け手の送り手化】であるという理想論への懐疑が生まれる。

D・コーエン (2009) が指摘している通り、【受け手の送り手化】を実現したインターネットは、管理主体が見えにくく、漠然とした「(神の) 見えざる手」(≒自由放任) で動かされている。つまり、中央集権的なマス・コミュニケーションの方が、中心にいる新聞社や放送局などが送り手であるという責任の所在が明確なだけでも、問題が起きた時に対応しやすいのである。

また、日本のネット上では、話題にされるヒト・モノ・コト、それらのニュース・ソースの多くが地上波テレビの内容だという珍現象が見られる。結果、マス・コミュニケーションの送り手の内側で、世間に流通する社会情報の多くがつくられているのが、日本の現状なのである。

さらに E・オルターマン (1992) が提示している「パンディトクラシー」(punditcracy) という枠組みは、送り手であるテレビのコメンテーターが、受け手に対して最も影響力のあるオピニオンリーダーとなる構造を示している。

4. 単純化したメディア論をめぐる

U・エーコ (1967) は、閉ざされた作品と開かれた作品という二つの作品論によって、メッセージが乗る箱であるメディアの機能を簡潔に説明している。

- ① 送り手 (作者) が伝達効果を計算していようがいまいが、作品を完成させた時点において、受け手は作品に接することはできないため、それは一義的に固定され、送り手だけの閉ざされた作品となる。
- ② しかし、メディアで発信された作品は、受け手 (読者) が個人的な視点 (感受性や文化的背景など) をもって理解した時点において、受け手の数だけ多様に解釈される、つまり作品は開かれている。
- ③ 結果、あらゆるメディア作品は、文学や美学上、送り手 (作者) の計算あるなしに関わらず、受け手 (読者) の個人的解釈というプロセス (①→②) を経て、送り手 (作者) の計算通りに伝わるとは限らず、不確定にならざるを得ない。即ち最終的に、箱はすべて、受け手 (読者) へ開かれている。

以上のように解題すれば、エーコは文学に限らず、メディア作品をめぐる最も基本的なマス・コミュニケーションの道筋を提示していると言えるのである。

さらにエーコは、アインシュタインが「特殊相対論」で、「時間」概念における「観察者」の「主体性」を認め、ハイゼンベルグが「不確定性原理」で、「空間」概念における「観察者」の「主体性」を認めるように、物理学の分野において、量子力学の考え方が「観察者」としての人間に、全面的な「主体性」を認めようとしている考え方もなぞっている。エーコの想定は、観察対象がメディア作品の場合も同様で、メディアは観察者に開かれ、その内容は観察者に決定権があるという考え方と重なりと示唆している。

マス・メディアを対象とした G・ガーブナー (1976) らの古典的な研究では、テレビを中心に考えた比較検討で、結果的に開かれたメディア論の要点を整理している。

- ① 「印刷物と違い、テレビは（文字を読む）リテラシーを要しない。」
- ② 「ラジオと違い、テレビは話しかけてくれる上に、見せてもくれる。」
- ③ 「演劇、コンサート、映画、そして教会とも違い、テレビは出かけて行く足労を要しない。」
- ④ 「映画と違い、テレビは『無料』である。（CM代があらゆる商品に上乗せされてはいるが。）」

(Gerbner, G. and Gross, L., *Living with Television: The Violence Profile*, Journal of Communication, Spring 1976. p. 176. 拙訳.)

ガーブナーは、テレビというメディアを、バリアフリーと同様、誰でも使えるリテラシーフリーなメディアだと定義している。だからこそ、S・フェッシュバックとR・D・シンガー（1971）が調査研究において明かした、テレビにおける過度な性描写や暴力表現は、視聴者に悪影響を及ぼすというよりも、ストレス解消というカタルシス効果が大きいという結果が一定の効力を持つのである。もちろん、テレビの表現に助長されて犯罪行動に出た人間も、まったくいないわけではないのであろう。これは、交通事故での死者が毎年、何千人もいるが、もはや物流システムに組み込まれた車を全廃するわけはいかない問題と似ている。要は、運転手に開かれた車に罪はないのだから、交通事故対策としては、運転手の技能を磨くしかない。同じように、開かれたメディア像も、受け手が間違った読み解きをしないように、リテラシー教育を徹底するしか策は見えません。

5. 単純化した内容論をめぐって

2016年、アメリカの大統領選挙期間中に、トランプ候補の広報戦略担当であったスティーブン・バノン氏がフェイクニュースを流したと批判された。例えば、全世界に大きな影響力を持つ宗教指導者がトランプ候補を支持しているという内容のニュースを手持ちのメディアから流したという。

この件に関して、当事者のバノン氏は、その宗教指導者の周辺の人物が「彼（宗教指導者）はトランプ候補を支持している。」と言っているという二次情報のニュースを流しただけで、フェイクではないと強弁したとも伝えられている。つまり、バノン氏は又聞きしたという事実を流しただけで、結果、受け手の一部が、又聞きの説明部分を聴かずに、宗教指導者がトランプ候補を支持したという部分だけを勝手に切り取り、一次情報だとして信じてしまったと言うのである。この誤った情報の流れは、バノン氏だけが演出した悪意なのだろうか。

日本のメディアでも、過去の報道を紐解いてみると、多くの政治記事に、政府関係者がこう言った、首相周辺がああ言ったなどという曖昧なニュースソースからの二次情報に出会う。それと、バノン氏が流した、宗教指導者がトランプ候補を支持していると言っているひとがいるという紛らわしいニュースは、どこが違うのだろうか。同様の二次情報であろう。

この二次情報におけるフェイクまがいの紛らわしさを無くすには、情報源の明示を義務付けるしかない。では、ニュース報道の内容において、常に情報源を明示すべきなのだろうか。もし、内容の情報源を明示することが、メディアに義務付けられる、または至高の倫理観であるとされたならば、多くの情報提供者は、反響を恐れて沈黙するだろう。匿名であるからこそ、報道できる内容に溢れているのは、今に始まったことではない。そして、匿名でしか報じられない情報内容のどれがフェイクなのかは、多くが藪の中である。

情報源があやふやなニュース内容に対しては、その真偽を、できれば見破り、不可能でも少なくとも怪しむ反応を送り手に示せるような直観のリテラシーを、我々受け手は編み出しておく必要がある。でなければ、絶対になくならないし、なくなりようがないフェイクニュースが、国の行く末を左右しかねない。

マス・コミュニケーションの受け手には、例えば、世界に最も影響力のある宗教指導者が、軽々にトランプ支持などと言うわけがないと《直観》でわかる単純なリテラシーは持ち合わせて欲しいのである。

でなければ、首相の横にひとを立たせて、悪意のある首相の発言を聞いたとやらせで言わせれば、「首相の周辺によると首相は〇〇と言った。」などというフェイクニュースが、誰でも簡単に流せるだろう。

マス・コミュニケーションの末端にいる我々は、そんなこと言うはずがないと簡単に見破る直観リテラシーを編み出すしかないのである。

直観に頼らざるを得ない理由は、以下の3点に集約できる。背景には、マス・コミュニケーションの過程において、研究者でもない大半の受け手が、フェイクニュースを検証しようとしたところで、無理難題だという環境がある。

(1) 著名な発信元以外の内容は、(匿名のリークもあり、素人には)真偽が確定できない。

(2) 溢れるニュースを、いちいち他のメディアにおける報道内容と比較して、チェックする時間も手間もかけられない。

(3) 内容が断定できているかを判断基準にすれば、(送り手には)逆に曖昧な表現なら許されるという逃げ道ができ、報道にあやふやな内容があふれる危険性がある。

よって、瞬時に見破る直観のリテラシーを鍛えるしか、フェイクニュースに惑わされない受け手の生き残り策はないのだろう。鍛錬の一案だが、例えば『メディア論』の講義において、教員=送り手、学生=受け手というシミュレーションで実践できる。

6. 解決策として単純化できる受け手論

送り手と受け手、どちらが優位なのだろうか？ これもメディアを挟んで、文学の受容理論とテレビの批評理論をアナロジーできる。

単純化できる説を二極。文芸批評家 E・D・ハーシュ (1969) は、“作者が先にありき”という作者中心主義を取っている。彼は、読むという行為は、作者が何を意図して、どのような意味を作品に込めたのか、それを読者が「解釈」させられることから始まると強調した。これはなにも、文学作品にのみ言えることではない。テレビのスイッチを入れて画面に向かえば、報道番組にせよバラエティ番組にせよ、作り手、送り手がそこに込めた意図や意味を、我々は「解釈」させられる視聴行為からはじまる。

対して S・フィッシュ (1980) は、“読者が先にありき”という読者中心主義である。彼は、作品が世に出て作者以外の目に触れた以上、読者の数だけ「解釈」(読み方)が存在し得ると主張した。番組も放送されて作り手以外の目に触れた以上、評価が分かれるように、最終的には視聴者の数だけ「解釈」(見方)が存在し得る。

報道、バラエティ、スポーツ中継、ドキュメンタリー、ドラマ、ワイドショー等々、テレビ番組ひとつを取っても、多岐に亘るジャンルが存在する。そして、そのいずれの番組を視聴する時でも、当てはめることが可能な批評精神の拠り所を、リテラシーの基盤とする。以下、柔軟に駆使できる多様なリテラシーを編み出して、提言を試みる。

誰もがテレビ番組を視ている時に行う価値判断として、第一に、当該メディアの内容を肯定 (pro) するか、否定 (con) するかという究極の選択をタテ軸に据える。第二に、テレビというメディアとその番組内容を、絶対的に没頭して視ているのか、相対的に(冷静に)突き放して視ているのかで二極化する。それをヨコ軸に設定する。絶対的とは、テレビだけに集中して内容に没頭して続けている場合もあれば、ながら視聴でも一瞬、内容に気を取られて物を落とすくらい没頭した瞬間の場合もある。逆に、相対的といっても、最初から無視するのではなく、終始ながら視聴で点けっ放しのまま、テレビの存在を忘れてしまうなど無自覚に冷めている場合もあるだろう。しかし、視聴後に振り返ってみれば、誰もが大別できるのが、「絶対/相対」的な視聴態度だと設定した。

これらを二択の二元論、ふたつの軸の組み合わせで、4つのリテラシー様相が編み出せる。

★「絶対/肯定」：従属というリテラシーの様相。

送り手の意図した意味を、無批判に受け容れる様相。受け手が解読に使用するコードは、送り手と同じコード I。それは、絶対的に肯定した見方なので、番組の内容および作り手、送り手に従属しているとも言える。

例えば、報道番組を視ている状況を想定してみる。「なるほど! そうだったのか。」とコメンテーターの解説に終始素直にうなづく依存的で受動的な態度。バラエティ番組を視ている状況なら、お茶の間で、家族みんな終始大爆笑している状況が、ここに相当する。

★「絶対/否定」：異議申し立てというリテラシーの様相。

送り手の意図した意味を解釈した上で、批判に転じる。それは、絶対的に否定した見方なので、クレームなど異議申し立てを行うという批評精神が生まれる。

送り手がメディアに載せた内容を読み解くのは、送り手のコードIに重なるが、受け手固有の解読コードI'と想定できる。ただ、コードI'を生み出す背景も送り手と重なり、同じ土壌（メインvs.カウンター・カルチャー／イデオロギー）に立って喧嘩しているような様相である。

「このキャスターの言っていることは間違っている。」と怒り出したり、「裸を出すなど俗悪番組だ。子供に悪影響を与えるから放送中止を！」などと、時には投書や苦情電話をしかねない能動的な態度。

★「相対／否定」：アバシーというリテラシーの様相。

送り手の意図した意味を解釈はしたものの、その結果諦め心地になる。絶対反対の熱い見方に対して、やんわりと相対的に否定する見方なので、シラケた批評精神が見て取れる。

送り手がメディアに載せた内容を、受け手独自の解読コードIIで読み解いた上で、送り手が立つ土壌（メイン・カルチャー／イデオロギー）からは、離れていく。

「ど～せ、私には関係ない話。」と無関心な態度であり、果ては「テレビなんか、どうせくだらないから、もう見ない。」とスイッチを切る態度も考えられる。

「日夜テレビを賑わす『テレホンショッピング』のCM。もはや『テレビで言ってるんだから信用できる』といったような、テレビに対する盲信は消え、逆に『テレビの中のことは嘘である』という考え方へ転換しつつある。」（ナンシー関『何様のつもり』角川文庫、1997.p.122.）

★「相対／肯定」：穿ちというリテラシーの様相。（穿ち：真相を見抜く）

送り手の意図した意味を解釈した上で、その裏側さえ推測してしまうような一枚上手のメタ受容。メディア側を突き放したような相対的な視点があるにも拘らず、内容は肯定するというひねくれた批評精神の発露とも言える。

送り手がメディアに載せた内容を、受け手独自の解読コードIIIなどで読み解いた上で、送り手が立つ土壌（メイン・カルチャー／イデオロギー）からは離れて、独立した土壌（サブ・カルチャー）を構築していく。

「この男性キャスターと女性キャスターは、絶対デキてる！」とか、「おっ、これ絶対にやらせだろ。こんな素人いないよ。ほらほら。」などと送り手が意図した番組内容とは離れたところで、自律的に楽しみはじめる態度。

「たとえば昔からある、教育テレビの幼児向け番組のおねえさんをいやらしい目で見るとか、講座番組の先生をカルトなキャラクターとして珍重するなどの視聴法」（ナンシー関『聞く猿』朝日文庫、1999.p.45.）

本研究では、冒頭に挙げた授業における学生の「先生、（のどのがんで手術の後遺症があるのに、）声デカいなー！」という反応は、嘲笑というより、愛嬌も加味した関西風の半笑いである。授業内容と関係ない、でも一面の真相を照らした正に穿ったリテラシーの発露と言えらる。

そんな次世代の学生たちに、リテラシー教育として、いちいちニュースの情報源を確認するよう指導したところで、実践は物理的にも不可能であろう。専門家に委ねるしか、時間も労力も注げない。そこで大学では、フェイクニュースなど瞬時に見破る直観を鍛えるしかないと言報告者は考える。

そして真実を見抜くための思考実験をできるのが、授業を行う教室なのである。授業後に提出してもらったミニレポートにおいて、教壇に立っていた教員に、ちゃちゃを入れることで、簡単に直観リテラシーを研くことはできる。そのために本研究の報告者は、自身がアルコール依存症者（自分の意志ではどうにもならない脳のコントロール障害という精神疾患の当事者）であることなど、プライバシーをなんでも開示している。しかし、その他のエピソードは、関西人ならではの話を盛ることもある。それを見破り、ツッコんだり、見事に茶化して真実を見抜いたミニレポートには、次回の授業でネタばらしをして、成績にボーナスポイントを与えると公言している。

そんな簡単なリテラシー教育を受けた次世代なら、世界的な宗教指導者がトランプ支持を表明したなどというフェイクニュースには、一次情報か二次情報かを確認するまでもなく、即座に、そんなアホな！と

ツッコめる直観を実装できているはず。直観リテラシーとは、授業でシミュレーションを重ねるなど、数値化できない経験値をデータ（論拠）にして編み出せるものだと報告者は考える。

相手の手の内を見破る超人棋士、羽生善治は「直感を経験で磨く」、「直感を信じる」と言い切っていた。（『プロフェッショナル』NHK, 2006年7月放送）

マス・コミュニケーションの過程において、送り手の手の内を見破れる受け手になるために、教員としての報告者は羽生の考え方をなぞって、直感をさらに学問の府では直観に向上させ、「直観は経験で研ぎ、その直観を信じる！」と授業で学生たちに、批評精神に満ちたレポートを書かせている。

参考文献

- Altman, E., *Sound & Fury: The Washington Punditocracy & the Collapse of American Politics*, HarpC, 1992.
- Cohen, D., *La Prosperite du Vice*. Albin Michel, 2009. (林昌宏訳『経済と人類の1万年史から、21世紀世界を考える』作品社, 2013.)
- Eco, U., *Opera Aperta*, Bompiani, 1967. (篠原資明・和田忠彦訳『開かれた作品』青土社, 1984)
- Enzensberger, H. M., "Baukasten zu einer Theorie der Medien," in Kursbuch 20. 1970, (中野孝次・大久保健治訳『メディア論のための積木箱』河出書房新社, 1975)
- Feshbach, S. and Singer, R. D., *Television and Aggression*, Jossey - Bass Inc, 1971.
- Fish, S., *Is There a Text in This Class?: The Authority of Interpretation Communities*, Harvard UP, 1980.
- 藤田真文「『読み手』の発見—批判学派における理論展開—」『新聞学評論』37. 日本新聞学会, 1988. p.67.
- 藤竹暁『シラケ時代の文化論』学藝書林, 1972.
- Hirsh Jr, E. D., *Validity in Interpretation*, Yale UP, 1969.
- 稲増龍夫「メディア文化環境における新しい消費者」星野克美（編）『記号化社会の消費』ホルト・サウンダース, 1985. pp.149-200.
- Lyon, D., *The Information Society-Issues and Illusions*, Polity Press. 1988, (小松崎清介監訳『新・情報化社会論』コンピュータ・エイジ社, 1991)
- 前田益尚「マス・コミュニケーション・プロセスにおける『受け手論』の地平—『受け手の優位性』論議をめぐって」『年報社会学論集』第6号、関東社会学会, 1993. pp.227-238.
- 前田益尚「マス・コミュニケーション・プロセスにおける『受け手の主体性』の所在」『マス・コミュニケーション研究』44号、日本マス・コミュニケーション学会, 1994. pp.116-127.
- 前田益尚『楽天的闘病論—がんとアルコール依存症、転んでもタダでは起きぬ社会学』晃洋書房, 2016.
- 前田益尚『大学というメディア論—授業は、ライブでなければ生き残れない』幻冬舎ルネッサンス新書, 2017.
- 前田益尚『マス・コミュニケーション単純化の論理—テレビを見る時は、直観リテラシーで』晃洋書房, (近日、刊行予定)
- Morley, D., *The Nationwide Audience: Structure and Decoding*, British Film Institute. 1980.
- Namba, K., *Comparative Studies in USA and Japanese Advertising during the Post-War Era*, International Journal of Japanese Sociology Number 11, 2002. pp.56-71.
- 佐藤卓己『テレビ的教養—億総博知化への系譜』NIT出版, 2008.
- 佐藤毅「もう一つの『受け手』論—戦略的メディア言説の読みをめざして—」『新聞学評論』37, 日本新聞学会, 1988. p.113.
- 山本明『反マジメの精神』毎日新聞社, 1969.